平城京左京三条二坊六坪

奈良郵便局移建計画地発掘調査概報

Ⅰ序章

1 調査の経過

この報告書は、奈良国立文化財研究所が、平城京左京三条二坊六坪にあたる奈良郵便局庁舎移転計画用地(奈良市尼ヶ辻ゴドサ甲669の1）において行なった発掘調査の概報である。

調査は平城京内の大規模開発事業に伴なう事前協議の結果、奈良県教育委員会の行政指導のもとに受益者負担で実施されるはこびとなり、近畿郵政局の依頼によって発掘の作業を同研究所平城宮跡発掘調査部が担当したものである。

まず用地内の遺跡の存否状況を確めるため、予備調査を行うこととして、昭和50年5月30日～7月9日までの約1ヵ月強の期間、本敷地内の南端に70m×5mの東西トレンチ、東端に90m×5mの南北トレンチを各1本設け計 800m²について発掘した。その結果敷地中央東寄りで園池の一部を検出し、また園池を画すると思われる塀、および旧河川跡、西方では数棟の掘立柱建物を検出した。このような予備調査の所見にもとづき、池の全容、坪内の建物配置を明らかにするため、昭和50年10月13日より12月23日までの約2ヵ月半の期間、調査面積約3400m²について本調査を実施した。両調査を併せて発掘は4200m²に及ぶ。

本調査の結果、六坪の中心に大規模な園池が完全な形で発見され、また、この園池と併存する建物・塀・溝・井戸などを検出し、六坪の京内での位置づけ、六坪内の様子が明らかになった。

予備調査、本調査は別記の工程で行なった。また、埋め戻しは、昭和50年12月24日から1月7日まで、遺構の養生を考慮して、各柱穴には真砂土を、池については、石の上、平均厚20cm以上砂で覆って、その上を土で埋め戻した。なお池の立石の高い部分では、埋め土が外側へ流出しないよう、杭と矢板で土留め施設の施工も一部行なった。また池埋め戻し前に、木樋・木枠など木製品のP.E.G.による保存処理、庭石などのエポキシ系樹脂による剝離防止など保存処置を行なった。

池および建物跡は庁舎敷地の全域にわたるため、現在遺跡の今後の取り扱いについて関係者の話し合いが続けられている。

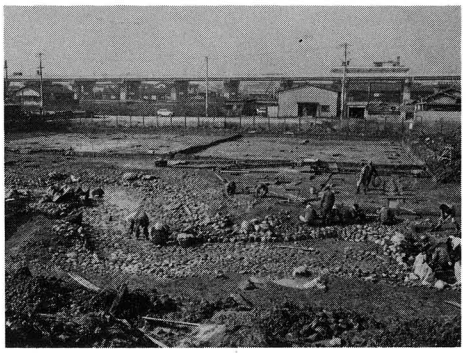

fig 1. 6AFI-PQ地区発掘調査状況

予備調査	
5.30	バックホーによる表土・床土排除
6.2～6.9	床土排除
6.10～6.30	遺構検出
7.1	園池写真測量（クレーン車）
7.2～7.5	遺方実測（園池以外）
7.7～7.9	補足調査　土層図作成
7.10～7.15	埋め戻し（ブルドーザー）
本調査	
10.8～10.9	現場小屋建設
10.14～10.15	バックホーによる表土・床土排除
10.16～10.28	床土排除（発掘区東半）
10.29～11.06	床土排除（発掘区西半）
11.04～12.03	遺構検出
12.4	空中写真測量（ヘリコプター）
12.6	現地説明会
12.7～12.9	地上写真測量（園池立面図）
12.10～12.23	補助調査、土層図作成
12.24～12.28	埋め戻し、養生

2 調査の概要

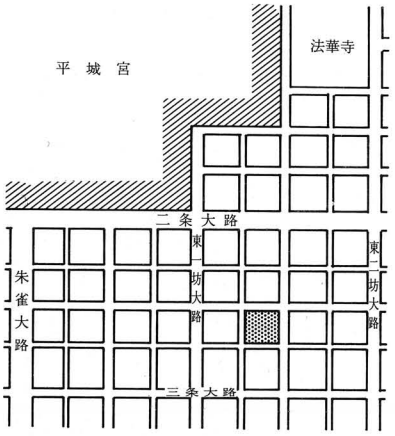

fig2. 平城京左京三条二坊六坪位置図

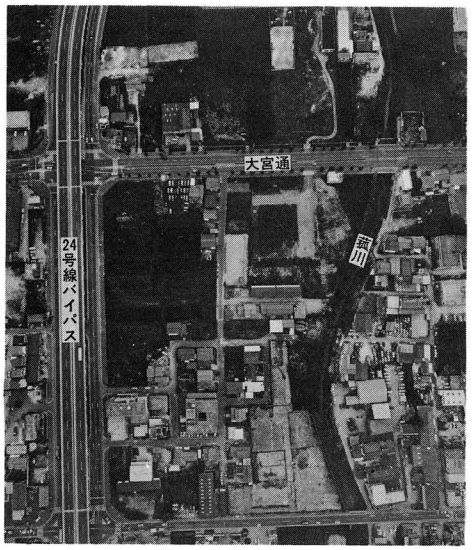

fig3. 6AFI 地区周辺地形

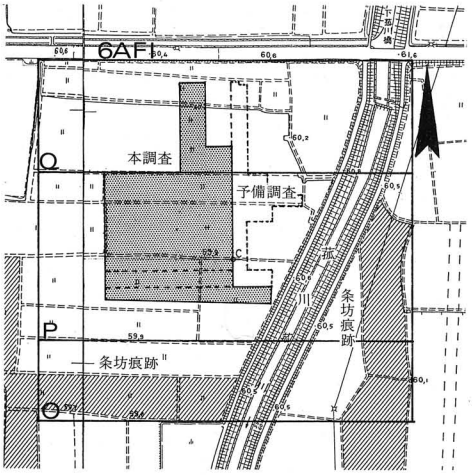

fig4. 6AFI 地区割図

平城京の発掘調査は従来ほとんど実施されたことがなく、碁盤目状の条坊もわずかに残された水田畦畔などから推定されるにとどまり、条坊内に営まれた住居や宅地割りの実態もまったく不明であったが、近年奈良の市街地の拡大に伴ない、開発の事前の調査として行われる機会がふえつつある。朱雀大路（奈良市朱雀大路復原計画・1973～1974年）、左京三条二坊十・十五坪（奈良市新庁舎建設予定地・1974）、左京五条一坊四坪（県警柏木基地建設予定地・1974）左京八条三坊（県営住宅姫寺団地建設予定地・1975）などはおもなもので、その結果京内の大路、小路の位置・巾員、坪の区画、坪内の宅地割などがかなり明確になってきた。

今回の調査地は、平城京条坊で左京三条二坊六坪に相当し、その中心部で坪の約７割にあたる面積を占めており、坪内の様子を知る意味で重要な遺構である。発掘ではその内の約½を全面的に調査し、坪の⅓強の遺構の状況を知ることができた。この地は奈良盆地の北辺に位置する沖積地であり、現在の標高は59.9ｍ前後で、周辺に比較し若干低く、元来低湿地である。また敷地東に隣接して菰川が南流し、東の二坊坊間路、南の条間小路、西の坊間小路など、一部畦畔に条坊地割りの痕跡がたどれる。

調査の結果、京造営前に六坪内を北から南に流れていた旧河川が数条あり、これらは条坊制の施行によって二坊坊間路に沿って堀河として改修したこと、またその内、坪の中心部を南流していた旧河川路を利用して園池が造成され、この園池を中心に塀、建物が計画的に配置されていることが判明した。園池は、全体を石組で固め蛇行した曲池のような形状をし、観賞と同時に、雅宴などの行事に供する庭の機能を持つものと思われる。園池への導水路堆積土中の木簡、池埋土中の土師器、瓦などの遺物の出土状況から、奈良時代を通して存続したことが判明した。

また、園池と併存する建物は、大きく２時期の改修が行われている。この内、園池を取り囲む形に、坪心より各70尺離れて四周にある塀や、彼方の東山を借景に園池を観賞する園池西方の南北棟などは、園池と一体の機能を持つものとして造成された。なお坪内の井戸・溝なども建物同様、坪心すなわち園池の中心から７尺または10尺の基準方眼により、計画的に配置されている。また、坪内だけでなく、六坪の東・北を限る坊間路、条間路の各巾員も、坪内の割り付けから側溝心々で40尺と推定できた。

遺物は、量的には少ないが発掘区全域から出土した。特に導水路から出土した64点もの多量の木簡と、他の京内遺跡と異なり、いずれも平城宮使用のものと同型式に属する軒瓦が注目される。

3. 写真測量

遺構の実測は、主に写真測量によった。写真測量は、精度の均一性、写真の忠実性、測量期間の短縮などの利点を持ち、最近大規模発掘の遺構の測量に利用されている。特に今回のような石敷・石組が多い遺構には有効である。

予備調査では園池の部分のみ、昭和50年７月１日、クレーンでカメラを釣りあげて撮影し、その他は遣方測量によった。

本調査では、昭和50年12月４日に、ヘリコプターにカメラを搭載して撮影した。写真測量は、あらかじめ標定点を遺構面に設置して、位置と標高を計測した後撮影し、この標定点にもとづき遺構図を作成した。成果品として、1/50モザイク写真と、園池については1/20の遺構図、その他については1/50の遺構図を得た。撮影の仕様は下記の通りである。

なお、池の立面図作成のため、予備調査Wild C-120・本調査ＳＭＫ-40（測量用ステレオカメラ）で地上写真測量を行なった。

撮影仕様

	カメラ	レンズ	フイルム	露出	絞り	高度	変位修正機
予備調査	ＮＡＢ150	168mm	イルフォード ガラス乾板	1/250秒	11～16	10～15ｍ	ツアイスＳＥＧＶ
本調査	ツアイス ＲＭＫ	153mm	コダック エアロタイプ	1/150秒 1/250秒	8～16	1/20図作成用…15ｍ 1/50図作成用…30ｍ	ツアイスＳＥＧＶ

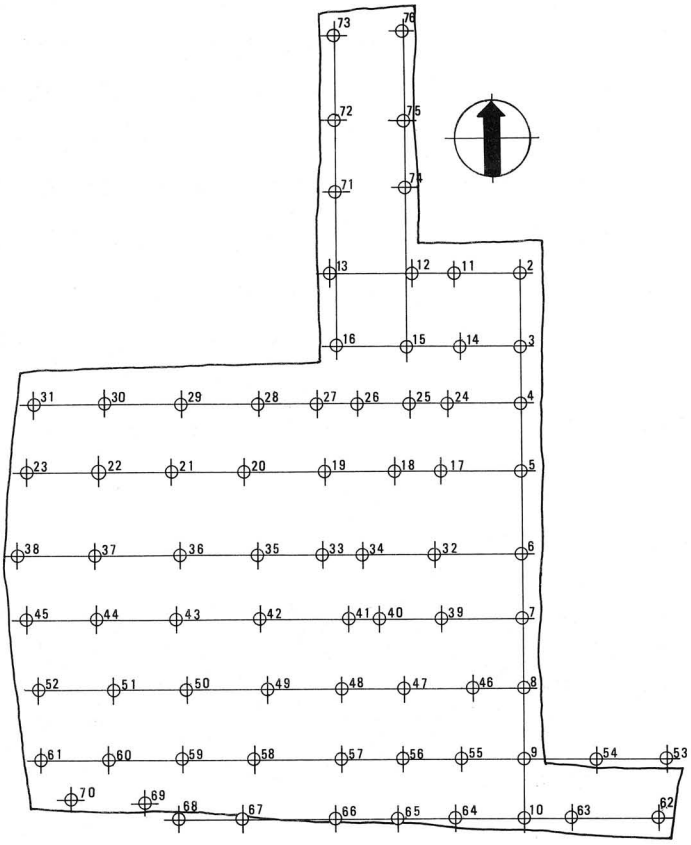

fig7. 6AFI-PQ地区標定点配置図

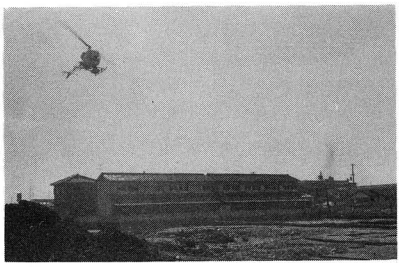

fig5. ヘリコプター空中写真撮影

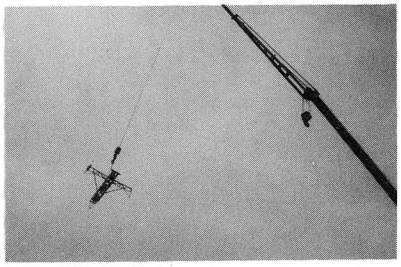

fig6. クレーン空中写真撮影

標定点No.	X	Y	H
B.M. 2	−146318.980	−17841.049	59.320
6	−146348.840	−17841.049	59.492
10	−146376.266	−17841.049	59.483
12	−146318.980	−17852.583	59.832
13	−146318.980	−17861.128	59.677
21	−146340.254	−17868.813	59.816
25	−146332.907	−17852.764	59.690
28	−146332.907	−17868.739	59.896
31	−146332.907	−17892.287	59.492
38	−146348.860	−17892.755	59.492
42	−146355.722	−17868.915	59.851
47	−146363.142	−17854.422	59.264
50	−146363.142	−17877.588	59.501
52	−146370.142	−17893.423	59.487
53	−146376.663	−17826.087	60.193
62	−146376.266	−17826.729	59.364
65	−146376.266	−17854.698	59.399
67	−146376.266	−17870.935	59.834
70	−146380.107	−17889.895	59.433
76	−146294.055	−17853.281	59.580

Tab.1 6AFI-PQ区標定点一覧表